

## 東日本・家族応援プロジェクト 2019 in 多賀城を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

今年も、多賀城市立図書館の共催、おおぞら保育園の協力を得て、2019年9月19日(木)～10月8日(火)で家族漫画展、10月4日(木)には支援者交流会を開催しました。10月5日(土)午前は、鶴野祐介先生(立命館大学)のコーディネートのもと、多賀城民話の会、おおぞら保育園のみなさんとのコラボによって、「うたとおはなしと伝承遊びを楽しもう 遊びのワークショップ」が開催されました。今年はお父さん連れも目立ち、たくさんの親子、家族が早くから待っていてくれました。たまたま通りがかった子どもたちも入れ替わり立ち替わり、計40名ほどが参加してくれました。

多賀城民話の会のみなさんは、子どもの年齢に合わせた民話や手遊びを準備してくれ、子ども、大人関係なく魅きつけられました。おおぞら保育園のお母さんによる絵本読み聞かせ、先生方による遊びや歌、鶴野先生によるお手玉などを楽しみました。「地元の民話から手遊び、読み聞かせ等々。バリエーションがあって楽しかったです。子ども(3歳)も楽しんでいました。子どもは民話等よりも、絵本の読み聞かせが面白かったようです。」(30代女性)、「お手玉がおもしろかった。わらべうたもぜんぶ楽しかった。」(10代女性)、「民話や手遊びなどは若い家族では伝わらないので、こういう会を通じて子どもたちに広まってほしいです。」(70代女性)などの声を頂きました。





今年の漫画トークも、1階のオープンスペースで行われました。毎年楽しみに遠方から来て下さる人から、通りがかりに足を止めて聞いている人まで参加の仕方はいろいろでしたが、34名が集まってくれました。「いつも団先生のトーク楽しみにしています。キュンとなる話、なるほどなるほどの話、明日からやってみようと思える話、とても心の栄養になる話ばかりです。」(50代女性)、「今年も来てくださり、先生のお話が聞けることうれしく思いました。“継続”ということの“重さ”“信頼”、心にとっても留まりました。“見ているよ”のメッセージは大切なこと、心にしみました。」(50代女性)、「無理解と個人情報課題の矛盾、痛感しています。震災から9年。応援を続けていただいていることに感謝申し上げます。」(60代女性)などの声を頂きました。

私も参加して下さった方と少し言葉を交わしましたが、震災でご家族を亡くされ、友達や家族と話しながら、頑張らなくてもいいんだと言い聞かせつつ日々過ごしておられるとのこと。多賀城の図書館でプログラムをやっていると、街はすっかり新しくなり、震災の影は見えにくくなってきていますが、そっと影を抱えつつ生きている人々がいることに思いを馳せることができたかとあらためて思いました。終了後の反省会では、十年を過ぎた後の見通しを含め、関係者で議論しました。根幹にある思いまで含めていろいろと語り合うことができ、蓄積してきた年月の重みを実感しました。

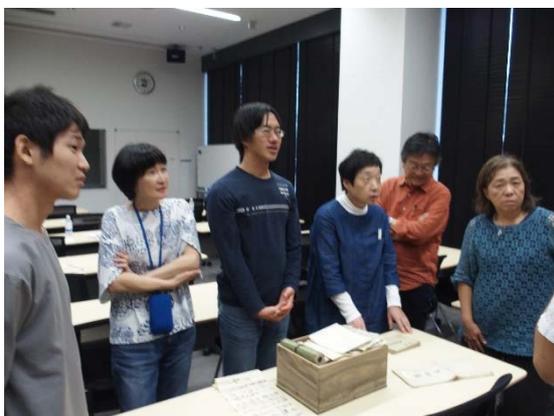
今年のフィールドワークでは、プログラム前日、上山真知子先生の案内で東北災害科学国際研究所を訪れ、古文書レスキューの取り組みについてお聞きしました。復興において”build back better”の”better”を考える時、それまでどうだったのかが意識に上がる、ふだん当たり前のように捉えていたものがなくなって初めて問題になる、その時に古文書がコミュニティの情報を提供してくれると話是非常に納得できるものでした。これまでも、折に触れお聞きしていましたが、あらためて先生方の貴重な取り組みに感銘を受けました。

最終日のフィールドワークは、福島県相馬郡の新地町へ赴き、東北大学東北災害科学国際研究所の川島秀一先生と、漁師の鈴木さん、荒さんのお話をお聞きしました。これまで漁業についてはあまり馴染みがなかったものの、ダイビングをやっていたことがあるので、海へ

の憧れは強く、海と共に生きる人々の姿勢には共感する部分があります。それだけに、将来に明るい展望を持ちにくい状況のなかで、日々、工夫や努力を重ねておられるみなさんの姿に頭が下がると同時に、自分もその一員であるこの社会に憤りと哀しみを禁じ得ません。釣師浜漁港でお二人の船を見せて頂き、荒さんの娘さんには船内も案内してもらいました。苦難に満ちていても、海とともに生きようとする人々の姿勢にこれからは是非学んでいきたいと思いました。

このようなプロジェクトを可能にしてくれている皆様方にあらためて感謝します。

#### 東北大学災害科学国際研究所



## 新地町漁師フィールドワーク





## 多賀城プロジェクト

団 士郎

漫画家としての展覧会、スピーカーとしての講演会場。この両方の収まり具合がよく、発信者としてはとても満足な多賀城だった。

先ず、漫画展だが最初、空間は昨年同様なのに、レイアウトのせいで狭い印象だった。更に、掛軸作品は視線からずいぶん高い位置にあり、上部は読めない感じだった。会場にきたKさんがすぐ指摘。翌日には読みやすい展示に変更されていた。

そうなの全体の印象だが、もともとそう混雑するようなものではない。土曜の昼前、自作品の展示をゆっくり眺めてみた。

左手の進入口から読み進めると自然に最期の作品まで、一冊の本を読むような充足が感じられた。最期の作品「くやし涙」は自作でありながら、何かグッとこみ上げてくるものがあり驚いた。

展示では当然だと思っていた矢印による順路表示はなかったが、会場で見ている限り、逆から読み始めている人はなかった。最初に狭い感じがしたのは、実はこの効果を意図したレイアウト展示の結果だったようだ。

思いがけないほど、会場アンケートがボックスに入っており、いくつか読んでみたが、継続開催していることに反応したものが多かった。地元の人達に、毎年この時期に開催していることが、少しずつ届いてきているのだろう。

図書館の閲覧空間における講演会も三度目。ようやく図書館内でマイクを使って講演する違和感から解放された。ここでは、ここに似つかわしい語り方をしたいと思った。むつ会場が専門職比率の高い会場だったので、多賀城では、一般の来訪者に分かりやすく話すことを心がけた。

はじめに、違和感のなくなった図書館トークのことを話したくなり、その分だけ予定の時間配分バランスが崩れた。その結果、第二話目の話の展開が駆け足になってしまった。

聞くつもりなく通りかかって、ふと足を止めたらしき姿勢の人が、そのままの体勢で聞き続けてくれたりしたのは初めてだった。

閉じた空間で、聞き入ってくれる聴衆に話すのではない講演のあり方が、少し感じ取れた。リピーターの方達からは大いに楽しんだと感想を貰った。

とにかく、自分の担当する部分への責任という観点から言うと、9年目という時期になって、落ち着いたパッケージになってきた印象が強い。物事が定着し、当然のようにそこにある。そんな風になるために10年という時間は、そうたやすく積み重ねになってくれたりはしない。むしろ賽の河原の石積みのような面も多々ある。

だが今回の多賀城で一番感じたのは、誰の何がと云うのではない、図書館スタッフも、こちらのスタッフも、全体として今後に向けて、何が考えられるだろうと当たり前のように議論する姿勢だった。これが蓄積、定着というものだろうか。10年目を迎える来年、その後のことを考えることが今からのテーマになっている。





## 「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城 2019」レポート 文学部教授 鵜野祐介

筆者が本プロジェクトに参加し、初めて多賀城を訪れたのが 2013 年 10 月のこと。大震災から 8 年半が経ち、7 回目の訪問となる今回の心に残る出来事を書きとめておきたい。

### 民話の語り部・安倍ことみさんとの再会

10 月 4 日午後、本プロジェクトでも 2017 年にお話を聞かせていただいたことのある女川町の安倍ことみさんのご自宅に、今回は一人でお邪魔した。地元の小学校や高齢者施設などで民話の語り部の活動をしておられることみさんと初めてお目にかかったのは、2013 年 8 月のこと。以来、毎年 1～2 回訪れては、いくつかの民話と、ご自身の被災体験や町の復興状況について伺ってきた。いつも心尽くしの手料理を（寒い季節には玉子酒も）用意して下さり、舌鼓を打ちながらお話を聞かせていただいている。

昭和 6 年（1931 年）生まれ、今年 88 歳になられることみさんは今も毎週木曜日の朝、小学校に行って民話を子どもたちに語っておられる。十数年前にご主人を亡くされ、2011 年に津波でご自宅を失い、避難所、仮設住宅での生活の後、昨年 4 月から震災復興住宅に移り、2 階の一室で一人暮らしをしておられる。2 年前に事故で腰を痛め、歩くのがつらくなったのと、少し耳が遠くなったようだが、メガネをかけなくても新聞が読めるそうで、「人前で話すことが認知症予防になっているのかもしれない」と笑いながらおっしゃる。なるほどと納得。

今回ことみさんから、「死ぬ薬」という話をはじめて聞かせていただいた。——姑にいつもいびられている嫁が、これ以上我慢できないと医者への許を訪れ、「死ぬ薬」を処方してくれるよう頼む。事情を聞いた医者は、いったんは「人殺しを手助けしたことが分かったら自分も医者が続けられなくなる」と断るが、嫁の懇願に「それでは一週間後に薬を取りに来なさい」と告げる。一週間後やって来た嫁に、「毎食後、おかつあんには『元気になる薬だ』

と言って一服飲ませなさい。一週間分ある」と医者薬を渡す。言われた通り、嫁は姑に嘘をついて一週間薬を飲ませる。すると姑は前よりもっと元気になる。嫁が医者の方へ行ったらこのことを話すと、「もう一週間続けてみよ」と医者は同じ薬をもう一週間分嫁に渡す。また一週間が経ったが、姑はますます元気になる。嫁はまた医者の方へ行ったら報告すると、「本当は、これは元気の出る薬だ。だがもう一週間飲ませてみろ」と医者に言われ、その通りにする。姑はなおさら元気になり、いい薬を飲ませてくれたと嫁に感謝する。それまでずっと姑にいびられてきた嫁は、姑の言葉をうれしく受けとめ、それからは二人ともやさしくなった。どんとはれ――。

稲田浩二『日本昔話通観』第28巻「昔話タイプインデックス」では「426 姑の毒殺」と登録され、全国的に伝承されている話だが、筆者が実際にこの話を聞くのは初めてだった。前日この話を女川小学校で5年生に語ったということみさん自身も、5年生の頃にお祖母さんから聞いたという。お祖母さんは、ことみさんが小学校を卒業する頃まで様々な民話を語ってくれたそうだが、小学校低学年ぐらいまでは動物が出てくる話や笑い話が多く、「死ぬ薬」のような「嫁姑の話」は高学年になってからだったように思う、それで自分も同じようにしている、とことみさんはおっしゃった。

もうひとつ、初めて聞いたこと。この話のおしまいに「どんとはれ」という言葉がついている。宮城県や岩手県などで広く使われている形式句（結末句）だが、ことみさんはお祖母さんから、この言葉の由来は「ごんど払い」と教わったそうだ。「ごんど」とは「藁くず」のことで、外での百姓仕事をした後、着物に付いた「ごんど」を払い落として家の中に入るのが「ごんど払い」、つまりお百姓が一仕事終わった時の所作にちなんだ言葉が訛って「どんとはれ」になったというのだ。まさに「目から鱗」だった。

ことみさんの語れる話のレパートリーは百話ぐらいあり、7割がお祖母さんから聞いた話、残りの3割が語りの活動をはじめてから本などを読んで覚えた話だそう。彼女がお元気な間に、まとまった時間を取ってお邪魔し、できれば百話全部収録させていただこうと考えている。

### プログラムの振り返り

5日午前に行われた「ワークショップ うたとおはなしと伝承遊びを楽しもう」は、昨年同様、第1部が多賀城民話の会による「ふるさとの民話と手遊びうた」、第2部がおおぞら保育園による「絵本とペープサート」、第3部が筆者の進行による「伝承遊び」を30分ずつという構成だった。図書館側の集計では、参加者は子ども21名、大人16名ということで、昨年よりもずいぶん多かった。チラシ配布を始め、各方面に広報活動をしていただいたおかげだろう。

第1部は、幼い子どもでも内容が分かるような笑い話や動物が出てくる話をして下さり、途中で手遊びもはさんで下さったせいか、昨年よりも参加者の反応がとてもよく、盛り上がった。今年3月に、多賀城民話の会の方がたとお会いした際に、昨年の反省を生かしたいと

おっしゃって、ご一緒にいろいろと方策を練った、その成果が表れたように思う。中でも、前会長の齋藤さんの手遊び「かっぱかっぱかっぱ」は参加者全員をいっぺんに魅きつけた。さすがだなあと感じた。

第2部では、おおぞら保育園の5人の先生（保育士さん）が来て下さり、今年も「マジック」をはじめ、バラエティに富んだ出し物が前半にあり、後半は園に通う子どものお母さんによる「普段着の絵本読み聞かせ」が行われた。大変お忙しい中、出し物の準備やお土産の作成など、例年のことながら、手間暇かけてこの日に臨んでくださっていることがよく伝わるプログラムで、頭が下がる思いだった。

第3部は過去2回、コマ回しや羽根突き、ゴムとびなど、全身を使う伝承遊びも組み込んだが、安全面に配慮して今回はびゅんびゅんゴマとお手玉遊びに絞って行った。お手玉はおおぞら保育園に準備していただいたものを使い、びゅんびゅんゴマは、元保育士で現在語り部としてご活躍の藤田浩子さんからいただいた手作りゴマを使って遊んだ。コマの方は、幼い子どもには「ビューンビューン」と鳴らすのは結構難しかったようで、お父さんやお母さんの方が熱心にチャレンジしているのが印象的だった。一度鳴り出すと大人でも快感が得られる遊びだと思う。お手玉遊びは、藤田さんの著書『あそべ！やまんば』に紹介されている、輪になって座り、数珠送りのように玉を順送りする遊び方を、いくつかのうたを歌いながらやった。お手玉自体が、その感触、重み、音、カラフルな色合いなど、これを使って遊ぶ人の五感に訴える力を持っているが、そこにリズムカルで明るいうたが付くことでなお一層、参加者全員の心を弾ませ、また一つにつないでくれるものだと実感した。

全体として、これまで筆者が担当して多賀城で行ったワークショップの中で一番満足度の高いものになったように思う。それは多賀城民話の会やおおぞら保育園の皆さんとの関係性がより一層強くなったことの現れでもあり、また会場設営を下さった多賀城市立図書館のスタッフの方がたのご尽力によるところも大きいだろう。この継続性を大切にしながら、そこに新たなエッセンスをどう加味していくか、来年度に向けてまた考えてみたい。

#### 新地町フィールドワーク

6日（日）朝8時半にホテルを出発し、多賀城駅から仙台駅を経由して10時15分新地駅に到着。東北大学の川島秀一先生と、現在川島先生の「親方」である漁師・鈴木春雄さんが出迎えて下さった。お二人の車に分乗して大戸浜の集会所へ。ここで午前中は川島先生のお話を伺い、鹿狼山腹の「鹿狼の湯」での昼食（かき揚げ蕎麦が絶品！）を挟んで、午後から再び集会所で鈴木さんと若手の漁師・荒さんのお話を伺い、その後、近くの釣師浜漁港へ行って、お二人の所有する漁船を見せていただきながら話の続きを伺った。

日本全国の漁労技術や習俗の研究、またザシキワラシをはじめとする東北の民間信仰の研究で広く知られる川島秀一先生とは、東日本大震災の後、日本口承文芸学会や民博の共同研究などでご一緒してきたが、いつお目にかかっても、その名声とはうらはらに、偉ぶったところが微塵もない、腰が低く気さくな方で、自分もかくありたいものと思わされる。今回、

1 か月半ほど前にダメモトで取材のご依頼をしたところ、思いがけずご快諾下さり、午前中のお話では、「漁師見習い中」とおっしゃるご自身の「修業話」を交えた新地の漁業の現状について、パワーポイントを使って分かりやすく説明して下さいました。のみならず、2人の漁師さんの取材手配や、集会場や昼食会場の手配、さらには鈴木さんと2人で我々9名を駅 - 集会所 - 昼食会場 - 集会所 - 漁港 - 駅と車で運んで下さる運転手役まで務めて下さり、おかげで充実感あふれる一日となった。川島先生に心から感謝したい。

また、午後から話を伺った「親方」鈴木さん(67歳)、「若手漁師」荒さん(47歳)も、「海に生きる人びと」とその家族の、海とつきあう楽しさや喜び、ポスト3・11の福島に生きる厳しさや将来への不安、その両方について、率直かつユーモラスに語っていただいた。それから、午後の間ずっと同席してくれた、来年小学校に入学するという荒さんのお嬢さんが、お父さんの船内に私たちを導いて、操縦室で誇らしげに説明してくれたことも微笑ましかった。

この日、川島先生のお話の中に、「海で心を痛めた者は、海でしか回復できない」という言葉があった。3・11の津波で川島先生はお母様を亡くされ、鈴木さんは弟さんを亡くされた。それからの8年半、お二人は海に生きることでご自身の「心の回復」に努めてこられたに違いない。放射能汚染の風評が今なお残る福島の漁業の現状は、週3日の試験操業しか認められないことをはじめ限りなく厳しいが、それでも新地の漁師たちが可能な限り海に出て漁を続けているのは、お金のため生活のためということではなく、自分が自分であることを確かめるためであり、そしてまた、亡くなったかけがえのない存在のたましいを身近に感じるためでもあるのではなかろうか。

また近い将来この地を訪れて、皆さんのお話の続きや、今度は漁師たちを支えるケアちゃんたちのお話も伺いたいと強く思った。

## 東日本・家族応援プロジェクト多賀城 in2019に参加して 人間科学研究科 対人援助学領域 M1 宇佐見 佳純

### —プロジェクト参加の動機—

私が本プロジェクトに参加したのは、今まで生きてきた中で震災、被災といった“事象”をただメディアでしか触れてこなかったこともあり、災害により傷つかれ、それを超えられた方々の「当事者性」を想像する力がなと感じたためだ。あまりにも距離を感じるこの“事象”を経験的に知り、当事者性を慮る素地を作りたい、現地の方々—自分との接点を見つけないかと思ったのが理由だった。

事前学習でリサーチした場所は、宮城県多賀城市。他東北の都市と比較しても市自体の災害レジリエンスが高く、歴史文化を市のシンボルとして掲げ、伝承される儀礼・習俗等民俗学的要素がコミュニティの活性化や減災施策に大きく貢献している点が興味深かった。今回は、これら東北地方ならではの在来知を直に見聞きしてきた。

## —プロジェクトの概要—

初日のフィールドワークにおけるタガの柵(き) 史跡・震災ツアーガイドーでは、国の特別史跡である多賀城跡や重要文化財の多賀城碑をはじめ、歴史的に所縁のある地をじっくり歩いて回った。また、震災ガイドでは、市内の家々の塀に残る泥と傷の海水到達線や、海岸線からわずか2kmであるにもかかわらず、全く海が見えない独特の市街地形(およそ海拔7m)を歩きながら見て、伝承の地「末の松山」には水が押し寄せなかった等伝承を詳細に伺うことができた。云百年規模の昔話・言い伝えに残る災害時の知恵の大切さだけでなく、地形と都市形成の在り方を今一度考える機会となった。

また、プロジェクト一日目は東北大学の IRIDeS にお邪魔し、震災により途絶えた文化の復元・再生について、活字・言葉・叙述といった古文書復元による貢献の在り方を最先端の技術を通して学ぶことが出来た。長年にわたる多賀城市立図書館、通称 TSUTAYA 図書館におけるプロジェクトでは、これまで継続してきた中で習熟した場の空気、交流と協力を通して相互補完的な関係となった異なる専門フィールドの様子を目の当たりにし、改めて10年規模の試みのエネルギーを感じた。今後も、古い人(世代やプロジェクト参加期間が長い)と新しい人が交差する充実した拠点となってひいては地域の活性化やつながりの回復にどんどん波及して行ってほしいと感じる。

最終日は、三陸沿岸の風土的な特徴である山海至近という地形を見ながら福島県新地町に入った。「天運循環、往きて復らざるなし。」海とは切っても切り離せない、そんな独特な信仰と職業観からくる震災といのちの捉え方は自身にとって非常に新鮮で、後世から続く伝統的習俗と生業と人生とが一体となった漁師の世界を肌感覚で知ることができた。

そのほかにも、震災直後に生まれた漁師さんの娘さんと偶々買ったおはぎを交換する「互惠性」あふれる場面だったり、ユイコ(漁業をすご家族同士が協力し合って生活する風習)のような「共同性」を知れたり、空間的に自身も大きな流れの一部になれたような、そんな経験であった。記憶の人間化もしくは集団的記憶と呼ばれるそうした営みの”足場”にここまで間近に触れることが出来たととても良かったと感じる。

## —プロジェクトを通じた学び—

最後に、今の今まで<被災>という文化につながりを持ってこなかった自身にとって、多賀城～仙台～新地町の在来知、そして被災地の負の感情・様相は衝撃であり、受け止める内なる軸や支えが本当の意味で無かったことを痛感している。ただ、そうした渦の中に巻き込まれたからこそ、現地の方々と共有できた感覚、気づきが生まれたのだと思える自分がある。これらは今後積み重ねることで地理的、時間的な軸の中で「当事者性」の理解につながっていくものかもしれない。娘さんが漁船へ案内してくれたように偶然性のなかにつながりが生まれ、これまで区別されてきた被災地と自身がつながり、今では自身の経験の延長線上に彼女の経験があると身近に考えられるようになった。

その土地に昔より何が息づいており、どのような再生儀礼・レジリエンスがあるのか。真の防災・減災は自然災害から命だけを保障するものではなく、震災前より続く生活と文化を守るものであらねばならない。「支援の主役は誰なのか」「実践なき知はあり得ない」「フィールド/暗黙知に触れてこそその対人援助」という表現を見つめ直す、非常に有意義な時間であったと思う。

今後は、自らの状態を省みる姿勢だけでなく、「こうしたい」という信念的なものや、感情や様相に流されない倫理性を養っていきたいと思う。これらが漁師の方の言う互惠関係・円環的周期のように、ひいては東北の地の人々に還元されていくものに具体化していければ、もっとよいと思っている。

最後に、プロジェクトの企画実施者である先生と大学関係者の方々、準備・同行してくださった先輩方、今回かかわり、ご協力いただいた多賀城市、仙台市、相馬市の皆様、一緒に多賀城へ行こうと集まった2名の院生に感謝の意を表す。

**東日本・家族応援プロジェクト 多賀城に参加して**  
人間科学研究科 心理学領域 M1 高島啓志

**・4年ぶりに宮城県を訪れて**

私が初めて宮城県を訪れたのは2014年の3月、私の大学入試が一息ついた頃であった。震災の翌年から高校の同級生とともに募金活動等を行っていたこともあり、卒業旅行として宮城県の女川を訪れたがその頃はまだ交通網が十分に回復しておらず、途中の駅で降りてバスで女川まで向かったことを覚えている。次に訪れたのが2015年、大学2年生の夏。この時は仙台市に観光として行ったが、1年前に見た女川の風景とは打って変わり震災の被害を感じはしなかったため、もう復興は終わったのだろうかと思ってしまう。

そして今回。3度目の宮城県訪問であったが、多賀城市に降り立ったのは今回がはじめてであった。降り立ってまず私たちは事前フィールドワークとして「多賀の柵」の松村さんに多賀城市や多賀城市が震災で受けた被害について聞かせていただいた。津波の到達した高さが記された電信柱や、津波の跡が残ったフェンス、そして当時の写真などを見せていただき、8年前に確かにここで多くの方が亡くなられたんだということを再度認識した。海から2kmほどしか離れていないというのに、全く市内から海が見えなかったということにも驚き、自分が住んでいる町の地理的な特性を知っておくことの重要性を感じた。

**・3日間にわたるプロジェクトを通じて**

プロジェクト1日目は、東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS)を訪れ震災が起きた頃の映像を見せていただき、また古文書レスキューについても話をきくことができた。復興とい

う意味の英語“Build Back Better”における”Better”が何を基準に「より良く」するのか、という問いかけにはハッとさせられ、普段自分たちが暮らしていることがいかに当たり前のことのように受容していたかを痛感させられた。古文書レスキューについては、先代から引き継がれてきた古文書を守ることがその土地に生きてきた人々の記憶を救うことであり、“Better”を考える際の助けにもなるということを知ることができた。その日の夜は前多賀城市立図書館館長の丸山さんたちと一緒に食事をしていただき、震災直後の市内の様子や復興のためにご尽力された方々の壮絶なエピソードを教えてくださいました。そこでは私がテレビの報道で知ることのなかった「生の被災体験」を聞くことができ、東日本大震災の悲惨さやどれほど過酷な状況を強いられていたかをわずかながらではあるが感じ取ることができたのではないかと思います。

2日目は多賀城市立図書館で毎年立命館大学が開催しているプロジェクトに参加した。民話の会の方からの民話伝承やおおぞら保育園の方からのペープサート、また鶴野先生のお手玉遊びを通して、昔から伝わる民話を語り継がれるとともに多くの地域の方々と触れ合うことができた。団先生のトークショーでは「しんどいときは『しんどい』と言う大切さ」や「自分の努力を労ってもらえることのうれしさ」、「他人のことに興味を持って、深くかかわっていくことでその人を幸せにする力を生み出されていく」ということを聞き、ここでも参加者の方と労ってもらえることのありがたさや実際に自身が救われた言葉などを伺うことができた。

そして3日目は福島県の新地町というところに行き、東北大学の川島先生や地元の漁師さんたちに震災の被害やその後の生活についてお話を伺った。海に生きる漁師さんだからこその津波に対する気持ちの持ち方や知らず知らずのうちに作り上げられた津波文化などを聞くことができた。一方で福島県で水揚げされた魚にはあまり消費者がつかず、先行きの見えない不安に頭を悩ませていらっしゃるリアルな現状も聞くことができた。また実際に漁船を見せていただきそこでもなかなか人口が増えなくて困っているということなどを聞いた。私が新地町に降り立って最初に思ったことが「海のそばに家が建っていない」ということだったが、聞くと海の近くの家は全て流されてしまったらしく、まだ完全には復興しきれていないということだった。私はそれを聞いて大学2年生のころに仙台市の様子をみて「復興はもう終わったのか」と思った自分をなんて浅はかだったのだろうかと思ひ、一度なくなってしまうものを改めて築き直すのにはどれだけの時間がかかるのかということを感じ直す機会となった。

## ・最後に

私は幸せなことに、関西で起きた阪神・淡路大震災の時にはまだ生まれておらず、今までそれほど大きな自然災害に遭遇したことがなかった。そのために獲得することのなかった防災に対する意識を今回のプロジェクトを通して呼び起こすことができたのではないかと

考える。

また私はこのプロジェクトを通して、微力ではあるが自分自身も東日本大震災や多賀城に伝わる言い伝えの「記憶・記録」を受け継ぐことができたのではないかと考える。防災に対する姿勢が十分に備わった多賀城市から学んだことを活かしてこれからいつ起こるかかわからない自然災害に対する危機感を持ち続けるとともに、私も今回のプロジェクトで学んだことを他の人に伝えていきたいと思う。

今回このようなことを学べる、素晴らしい機会を提供してくださった村本先生や平田さん、そして本プログラムでお世話になったすべての方に厚く御礼申し上げたい。

### 東日本・家族応援プロジェクト 多賀城に参加して 人間科学研究科 対人援助学領域 M1 高磯伯羽

私は兵庫県の阪神地区で、阪神淡路大震災の1年後に生まれた。そのため震災というものあまり知らない。しかし、私の人生は震災復興とともにあった。多くのものが失われた街が変化し、綺麗になっていった。私たちの小・中学校での学びは、震災の勉強が常に近くにあった。それがガラリと変わったのは東日本大震災が起きた時であった。世間の言う震災とは東日本大震災のことであり、震災によっておこるのは津波だとなった。さらには原子力発電所の事故の話が持ち上がった。その時私は、阪神淡路大震災は忘れられてしまったように感じ、とても悲しくなった。もうすぐ東日本大震災から10年が経過しようとしている。ここまでたくさんの震災が起こった。東日本大震災もまた忘れ去られていくのではないか。そんな不安感と、現地の忘れられない人々はどう思いどう忘れないようにしているのか、それが知りたくて本プログラムへの参加を決意した。

1日目、本プロジェクトの前日から私たち院生の行程は始まった。1日早く現地へ乗り込み、タガの柵の方の案内で多賀城市を観光した。まず初めに多賀城史跡へ向かった。多賀城は大野東人によって創建され、奈良時代に国府及び鎮守府の置かれた場所であった。その後多賀城市の市街地へ移動し、津波被害を受けた地域を見て回った。JR 多賀城駅周辺からは海が見えないため、市民は海に近いという意識は全くなく、しかし海拔は2mほどであった。そのため1mを超えた津波が襲った。建物の上や歩道橋の上へ逃げ、そこで3月の寒い夜を過ごすこととなった。寒さに耐えきれず亡くなった人々のことなどを学んだ。多賀城市観光を終え、多賀城市立図書館へ向かった。カルチャ・コンビニエンス・クラブを指定管理者とする子の図書館では、利用者の目的に合わせてブースや階層をうまく変えており、とても考えられたつくりをしていると感じた。

2日目、午前中は東北歴史博物館にて宮城県の歴史を学んだ。稲作が紀元前3世紀頃にはすでに伝わっており、江戸時代には日本有数の米の名産地となった。また東北地方では神様の姿を藁でこしらえた。そういったところから、稲作に対してとても強いこだわりと誇りを持っているのではないかと考えた。また、博物館では特別展として蝦夷展が開催されていた。

蝦夷というと、歴史の授業の中では朝廷に逆らい、独自の文化をもつ存在で、朝廷の支配には従わなかったというイメージがあった。しかし、実際には蝦夷の中には朝廷の支配に従ったり、交流を持ったりしていた地域がたくさんあったことがわかっている。また、蝦夷の人たちも農耕をしていたことが近年わかってきていると知った。

午後、東北大学災害科学国際研究所(IRIDeS)にて、はじめに東北大学災害科学国際研究所についての説明を聞き、その後『大津波 The TSUNAMI 3.11 未来への記憶』という映画を25分間視聴した。視聴語、東北大学災害科学国際研究所にて行われている古文書レスキュー活動についてお話を聞いた。

東北大学災害科学国際研究所は東日本大震災の1年後にできた研究所であり、文理融合を掲げている。東北大学災害科学国際研究所では古文書から自身の記載を拾うなどの活動を行い、過去から学び未来へとどう減災を生かしていくのかについて研究している。

また本研究所での成果や東日本大震災のことを伝えるために映画『大津波 The TSUNAMI 3.11 未来への記憶』をNHKと協同で制作した。この映画は現在では購入するか、或いは本研究所や神戸市の人と未来防災センターで視聴することができる。

本研究所で行われている古文書レスキュー活動とは、津波などの災害によって古文書や古い資料が流され、失われていく中で、それらを辛うじて見つけ、修復していく活動である。この活動は失われたコミュニティの記憶を残していく活動であり、人々の心やアイデンティティを失わせないための、人を助け未来につなげることとなる。また、この活動には高齢者の方々が多数参加している。肉体労働はできないがこういった活動から自分たちも役に立っているという意識が芽生える。古文書レスキューをしていると、「モノよりも先に人だろう。」という批判をよく受けると仰っていた。モノには人の心が詰まっており、それがモノの心へと成る。そのためモノを救うことは人を救うことと同義であると考えた。

その後、多賀城市立図書館で図書館の方々やおおぞら保育園の方々とお話をさせていただいた。学校の屋上へ逃げて助かった子どもたちや山へ逃げた子供たち、また大川小学校をめぐる裁判の話聞いた。図書館長の方は何度も「たまたま」という単語を仰っていた。助かったのは偶然、運が良かったに過ぎない。そういう津波被害者ならではの強い思いを感じた。

3日目、この日は多賀城市立図書館にて、午前中に民話の会のかたがたによる民話伝承や、おおぞら保育園の先生による手品や歌、園児の保護者による絵本の読み聞かせ、鶴野先生による伝承遊びなどが行われた。子どもの心の掘み方がとてもうまく、良い勉強になった。去年よりもお父さんの参加が多かったと聞き、続けることの力が発揮されてきたのではないかと考えた。また、子どものイベント事は、特に保育園の先生も参加してくださると、親御さんもその場を離れやすく、自分の時間が作りやすくなる。また親子で楽しめるイベントであれば親子の仲も深まるため、ぜひ一年に数度ではなく、高い頻度で行ってほしいと思った。

午後からは団士郎先生の漫画トークが開かれた。団先生による漫画トークもまた毎年行われているため、継続の力により多くの方が聴いておられた。開始前から座っておられる

方々だけでなく、たまたま通りかかった方や、途中から参加された方などもいらっしやった。続ける、継続するという力の力と団先生の持つてらっしやる魅力を改めて感じた。

3日目は福島県新地町大戸浜地区防災コミュニティセンターにて、東北大の川島先生や、新地町の漁師さんたちがお話して下さった。新地町の漁師さんたちの信仰や文化について学んだ。漁師には、大阪や東京のような地域と異なる、また猟師とも異なる信仰があり、それを伝えることで災害や様々なことから守り続けてきた。また、生きるか死ぬかの仕事をされているからこそ、独特の人生観や世界観を持ち、それが新たな力となって次の世代へ伝えていくという託す力を感じた。しかし、震災や津波被害により多くの人たちが海の近くから陸の方へと移住し、海の傍にはほとんど人が住んでいないという話を聞いた。また子どもの数が減っているとも聞いた。

私は、震災被害や津波被害など、災害によって失われたこと、感じたことをどう記憶し、後世へと繋いでいくのか、それが知りたくてこのプログラムに参加した。今回の体験を通して、歴史を残すという活動を知った。歴史を助け後世へ伝える、それが今を生きる人々への助けとなり、また繋ぐこととなる。被災された方の中には思い出したくなくて、住まいを移す方もたくさんおられる。しかし一方で地元への誇りと愛と歴史を失わないよう留まる方々もいる。そうした違いはどこから来るのか、また留まるにせよ移住するにせよ、住まう場所で新たな防災活動、減災活動が求められる。そういった活動の大切さと伝達に図書館が一役買っており、そういった活動を知ってもらうためにも様々なイベントを開く必要があると考えた。また何より、継続することは大きな力となると感じた。私自身、学校の授業だったとはいえ、長い時間震災の勉強をしてきた。だからこそこういった活動に興味があった。東北の地で行われている活動が、次の災害の被害を減らすことに、被災者の復興につながるようになってほしい。

### 「東日本・家族応援プロジェクト in 多賀城 2019」に参加して

博士後期課程 河野暁子

小雨の降る10月4日、東北大学災害科学国際研究所の訪問から、私の多賀城プロジェクトが始まった。東日本大震災から9年目となり、震災当時の記憶が徐々に薄らいできているのだが、研究所で見たドキュメンタリー映画は、私を一気に当時へ引き戻した。震災を経験していない未来の人たちへ、これだけの大きな災害があったことを伝える貴重な映像であった。研究所で行われている古文書レスキューは、被災した古文書を一枚ずつ修復していく気の遠くなるような作業である。大学と地域のボランティアが協力する形で、復興の一端を担っている。古文書の持ち主にとっても、自分たちの先祖が地域に貢献していた一面を知る機会となり、地域の力を再認識できる素晴らしい活動である。

研究所を後にし、プロジェクトの会場となる多賀城市立図書館に向かった。団先生の漫画

展は、自然と漫画を読み進められるように展示されており、アンケートや自由記述ノートからは、既に多くの方々が漫画展を見ていることがうかがえた。夜の支援者交流会に参加された方たちは、年に一回やってくるプロジェクトとの交流をとっても楽しみにされており、細く長く続けてきたプロジェクトの意義は大きいと感じた。

翌日 10 月 5 日は快晴となり、図書館の入り口には、開館前から多くの人が並んでいた。多賀城民話の会、おおぞら保育園のみなさんで行なった「うたとおはなしと伝承遊びを楽しもう」では、たくさんの親子が参加して下さった。民話もお手玉もとても楽しく、乳幼児から高齢者まで世代を超えた交流ができる時間となった。

午後の活動は、団先生の「漫画トーク」である。図書館内のオープンスペースでの開催は、たまたま図書館に来た人が足を止めることができ、予想以上に多くの方々が聞きに来られていた。中には毎年聞きに来ている方もいた。木製の本棚とたくさんの本に囲まれた空間は、団先生の語りとともに、とても暖かな場を作っていたように思う。

10 月 6 日の最終日は、福島県新地町でのフィールドワークであった。漁師の民俗学の講義を聞き、地元の漁師さんたちから震災前後のお話をうかがった。また、震災後に整備された漁港へも連れて行っていただいた。貴重なお話をたくさん教えていただいた中で一番印象に残ったのは、震災後、漁師という海の文化に丘の理論が当てはめられているという視点であった。新地町では、試験操業のため、現在でも震災前の半分ほどしか漁業を行なうことができない。また福島で獲れた魚は他の地域の魚より値が安い。どちらも原発事故の起きた福島だからという理由である。しかし、魚が周遊する海に県境はないのである。そして、この状況がいつまで続くのか見通しが立たず、次の世代が漁業で食べていけるのか等々、不安もあるとのことだった。

3 日間という短い時間の中で、とても多くのことを学ばせていただいた。震災から何年経とうとも、被災地で暮らしている方々と直に交流することは、大きな学びとなる。今後は、多賀城プロジェクトで学んだことを自身の中で消化し、社会に還元していきたい。

最後に、今回の多賀城プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

### 「証人」として現地に赴くこと

修了生/NPO 法人家族・子育てを応援する会代表 新谷眞貴子

国府多賀城駅に降り立つと、おおぞら保育園の黒川園長先生が迎えに来てくださっていました。園にどうしてもお伺いしたいと希望し、おおぞら保育園への 5 回目の訪問が叶いました。園の中に入ると職員の皆さんが温かい笑顔で歓迎してくださり、早速園児たちが話しかけてきてくれます。その居心地の良さを訪問する度にいつも感じます。「子どもたちが甘えていい場所」として「おおぞら保育園」は、私が子どもと関わる時の原点としてあり続けています。

黒川先生・小笠原先生と一緒にお話をさせていただきました。ふと震災の時のお話になりました。あの時、先生方は自分が被災しておられたにもかかわらず、園児たちを最優先にして、親御さんに引き渡すまで、ひと夜を避難所で越えられたこと、誰一人園児が泣かなかったこと、この信頼関係が普段から築かれていたことは親御さんにとってどれだけ有り難かったかわかりません。園児を守ることにしか考えなかったと仰った先生方。

過去の多賀城の震災プロジェクトに参加した時の自分の報告文を読み返しました。いつもおおぞら保育園の先生方の心には、「子どもたちが希望の灯り」として存在していたことが分かります。そのことが先生方の原動力になっていたことも感じます。震災後の保育園を再開する道のりを黒川先生から今年改めてお聞きしました。そして、今年も、日々の園生活での園児たちとの素敵なお話や、園児・家族・職員みんながオリジナルの運動会で盛り上がったお話を聞くことが出来ました。その話をされるときの生き生きとした先生方を見ると、自分自身も何か行動を起こしたくなってきます。

現地に赴く度に歓迎してくださる人々、初めて出会う方々、一人ひとりにとってそれぞれの震災後の日々を、日常を生きておられます。家族を亡くされた方々にもお会いします。

私ができることは傍でお話を伺うこと……。無念さややりきれなさ、人の粘り強さや信念、その中にある希望を感じます。

以前に女川町で読み聞かせの活動を続けておられる安倍ことみさんの仮設住宅にお邪魔して、民話を間近で聞かせていただいた時の空気感、300人以上の被災者の避難所のリーダーとして奔走された元多賀城市立図書館館長の丸山さんの当時の話。時代をつなぐ世界観や知らなかった災害の現状を教えてください、新たな発見があります。しかし、年を重ねる度に人の思いや姿の変わらないものを感じ、震災プロジェクトで多くの人々が積み重ねてきたものが形づくられているように思います。「証人」として自分がその土地に赴く意味を毎年考えます。

今年は、東北大学災害科学国際研究所で、今まで見たことの無いような映像を見て津波の怖さを改めて感じました。初めて多賀城に赴いて立った砂押川沿いにあったクローバー保育園の廃屋は跡形もなくなっていました。今年も跡地の傍の堤防に立って、改めてその時の津波の怖さを感じました。

被災した歴史的な資料を復旧されておられる大学の先生方、資料レスキューの方々の地道な復旧の作業にも驚かされました。

福島県新地町の漁師小野さんが強い思いで仰いました。「100年後、200年後の子孫に何があったか正確に伝えたい。そのために川島先生に記録として残してほしい」と。捕れた魚が99%安全にも拘らず、原発による放射能汚染の風評被害で翻弄されているその悔しさも感じました。

川島先生は、小野さんの思いを受けて、東北大学の教授をされながら、午前1時に漁が始まる船に乗り込んで記録と漁師の作業をされています。「(三陸海岸では)津波も大漁も、大きな回帰的な時間のなかで到来するという、言い換えれば、人々は海からもたらされる幸も不幸も繰り返してやってくるという捉えかたをしていたものと思われる」(川島秀一著『海と生きる作法—漁師から学ぶ災害感』)という、科学では測りきれない自然の大きな力に抱かれて人間は海と生きている考え方を知りました。

2016年に私は報告文でこのように書いています。「4年間震災プロジェクトに参加させていただきました。さまざまな方にお会いして、時間的なつながりと、復興に向ける思いとのつながりで、震災プロジェクトの縦にも横にも織り込まれる糸が、多くの人々によって、一つのものを織りなしていつているように思います。そして、このプロジェクトに参加する人に、それぞれの新たな人生や活動を起こさせていると感じています」と書いています。

自分が地域で子育て支援の活動を始めて3年半、今年も震災プロジェクトに参加させていただき、また原点に戻ったような気持ちで自分の活動に取り組める気がしました。

